July 7, 2010
第 2 号

NEWS LETTER

大阪女学院大学　大阪女学院短期大学

教員養成センター

●巻頭エッセイ……1
●特集：「英語の教え方教室」……2
・第１回勉強会……2
・第２回勉強会……3
●授業の玉手箱……4
●書籍紹介……4

巻頭エッセイ

東條　加寿子

― 英語力の構造を考える ―

今年４月に本学の４年制大学教職課程はスタートを切り、授業のデザイン力養成を主眼において様々な活動を開始しました。目下、本学教職課程の「基礎」構築中といったところです。何においても「基礎」は肝要です。しっかりとした礎があってこそ、その上に一つ一つ積み上げ発展・展開していくことが可能になるからです。

さて、近年、大学の英語教育では基本的文法事項を取り扱うリメディアル科目を設置する大学の増加が見られます。英語の基本構造についての知識の欠如が、残念ながら、大学で本来実践すべき発展的・専門的英語教育を阻害している状況があるからです。

一方、2011 年度から「コミュニケーション能力の素地を養う」べく小学校で英語必修化が開始されます。小学校から大学までの英語教育は系統だった一環したもので、段階的に確実に英語力を積み上げていくものでなければなりません。そのためには小・中・高・大の連携が不可欠で、とりわけ中学、高校の果たす役割が今後益々重要になってくるものと思われます。

ここで、英語力について、言語能力の構成要素を説明した Dual Iceberg の概念に沿って考えてみたいと思います。Dual Iceberg は 1980 年に James Cummins[注1] がバイリンガル教育研究の中で示したのが初めてですが、日本の英語教育論の中でも山田[注2] が独自の解釈を加えて使用しています。Cummins は、言語能力には BICS (Basic Interpersonal Communication Skills) と CALP(Cognitive/Academic Language Proficiency) があるとし、BICS は “manifestation of language in interpersonal communicative contexts” 即ち表層に現れる外部構造（日常会話など）であり、一方 CALP は “manipulation of language in decontextualized academic situations” 即ち認知や抽象的概念把握に関わる言語能力であるとしています。そして大変興味深いことに、第一言語（L1）と第二言語（L2）が関わる場合、二言語間で CALP は共有されるというのです。この “common underlying proficiency” を山田は「共通基底能力」と呼んでいます。

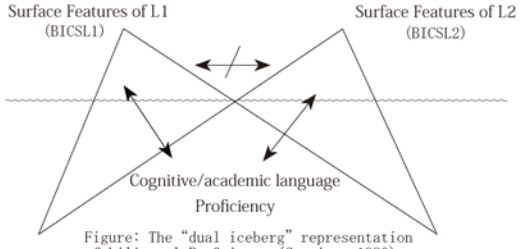


Figure: The “dual iceberg” representation of bilingual Proficiency (Cummins, 1980)
(＊矢印は筆者による)

L1、L2 をそれぞれ日本語、英語としてこの図を眺めてみると、英語力に関わるいくつかの側面が見えてきます。英語オーラルコミュニケーションは表層部 BICS(L2) の部分にあたりますが、これは共通基底能力の上に築かれていますから、コミュニケーション能力を育むためには当然のことながら言語の構造に対するしっかりとした知識が必要であることがわかります。また、二言語間で基底能力が共有されていることは、日本語力が英語力に寄与するという説を裏付けています。

ここで考えてみたいのは、この構造から読みとれる英語の和訳に関する示唆です。本学の教職課程では中高の先生方と英語の教え方の勉強会を開催していますが、先日その中で生徒の和訳の問題に議論が及びました。例えば、“It made him empty.” という英文に対して生徒は「それは彼を空っぽにした」という和訳をしてしまう、「(心にぽっかりと穴があいて) 空虚な気持ちになった」という状況が果たして理解できているかどうかこの訳からは確認するすべもない、ということでした。この例を Dual Iceberg に当てはめてみると、BICS(L2)（英語）を BICS(L1)（日本語）へ移し変えるいわゆる直訳では不十分であり、それは共通基底能力が稼動されていないことに起因していることがわかります。和訳においては、まず構文や単語の意味を理解した上で、英文はどのような状況を伝えているのかを自分の経験に照らし合わせたり一度概念を抽象化して考え、それから日本語ではどのような表現になるのかを考えてみるというプロセスを踏むことが必要です。

小学校から大学まで効果的に英語力を積み上げていくためには言語の表層部にのみ捕らわれるのではなく、共通基底能力を稼働していくこと、即ち思考を呼び起こす言語活動を実践することが求められているのではないでしょうか。

注１　Cummins, J. (1980). The Construct of Language Proficiency in Bilingual Education. In Current Issues in Bilingual Education. James Alatis ed. Georgetown Univ. Roundtable.
注２　山田雄一郎 (2006)『英語力とは何か』 大修館書店

特　集

教員養成センター　勉強会「英語の教え方教室」

報告：中井　弘一

― みんなで話し合ってみませんか　英語授業でのちょっとした工夫を ―

第１回勉強会　　５月８日（土）

第１回の勉強会を開いた。発表者を合わせて現役の先生が７名、我々を含め大学教育関係者が５名、本学の学生が 20 名ほどの参加であった。他の研究発表会とは異なり、発表者以外の先生も参加してゆっくりと話し合いながら進める勉強会、母なる川のにおいを感じ取りながら母川に回帰するサケのように、教室で様々な実践を行いその成果や経過を継承するために帰ってくるような勉強会でありたいと願っている。発表者の報告の一部を紹介する。

「佐野高校における英語Ⅰ　教育実践報告」

大阪府立日根野高等学校　　戸山　令子　教諭

前任校での英語授業改善に取り組まれた時にまず考えられたことは、佐野高校生の課題や気質をしっかり見据えて、授業の組み立てを考えていくことであった。

生徒の課題：３つの「ない」

①自分に（自信）がない。　（間違えることを恐れる）

②理解できるまで自分で考える（習慣）がない

③点数がとれる生徒でも、英語をうまく（読め）ない

生徒の潜在能力：３つの「ある」

①（コミュニケーション）能力がある。（誰とでも、仲良くなろうと努力できる）

②（思いやり）がある。（自分のためよりも、友達のための方が頑張れる）

③（やる気）がある。（やれば力が付くと分かると、時間をかけて考えることができる）

そこで、授業へのレディネスを確立するための生徒への約束事をされ授業に臨まれた。

身に付ける能力は、 How to teach yourself.

その力を身に付けるために守るべき３つのルール

①Be here.　②Be ready.　③Help each other.

指導法云々の前に、確固とした授業への姿勢を持つことがどんなに大切なことか、改めて認識させられた。

「清水谷高校での英語授業報告」

大阪府立清水谷高等学校　　冨永　重夫　教諭

現在教えておられる３年生リーディングの授業の様子を話された。最近、どの学校においても、授業の補助プリントが欠かせなくなっている。情報が溢れる時代にあって、漏らさず教え込むということが何となく求められるようになっている。冨永先生はそうしたプリントづくりを丹念にされている。

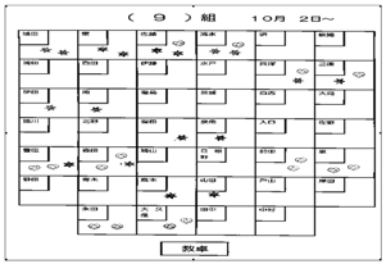
授業時間が限られている中で、大切なことを漏らさず指摘し、生徒に気づかせ考えるようするため、様々な質問が用意されている。冨永先生が留意されていることは、

① 段落内での key phrases, 接続詞、文頭の副詞句（transition/discourse markers）に注目しながら additional information はあまり意識せずに、文の流れから要点を押さえ、全体の内容把握

戸山教諭発表資料

●スタンプは二人分

参考資料（１）座席表



●それぞれの意見が言える質問

参考資料（２）

「地雷除去中に右腕右脚を失った Chris Moon の自伝」導入時

Q) "Dying might be the easiest thing to do."と思う時ってどんなとき？

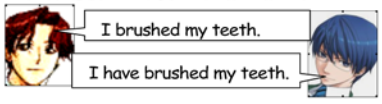
→これから読む英文(Chris の絶望感やそこからの立ち直り)を自分の人生の身近に感じさせる。

参考資料（３）

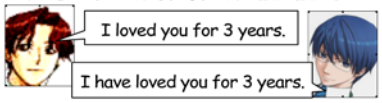
「現在完了」導入時

→過去形との違いを知ることで、正しい判断ができることを実感させる。

Q1) 今、「息さわやか～★」なのは、A 君と B 君どっち？



Q2) 「恋人になってくれそう❤」なのは、A 君と B 君どっち？



●お互いがお互いの先生役

＜ルール＞

① プリントをノートに貼り、持参

② つづりも答えられるように。

③ ２回目以降は最初に、それまでに合格した任意の１文を出題

④ シールを受け取り、教室に掲示してある名表の合格した合計数のところに貼る

⑤ 締め切りは○月○日

⑥ 朝８：30 まで
授業の開始まで、自教室でお昼休み
放課後

⑦ 平常点の大部分を占める

参考資料(4) １分半活動 → 基本例文暗唱 → プリント添削

比較(1)p. 60 p. 61　次の英文をｽﾗｽﾗ言えるようになったらﾁｪｯｸを受けに来てください

１年（　）組（　）番（　　）　英語が見えないよう！ここで右側を折り込む

印	No	日　本　語	ﾁｪｯｸ欄	英　　語
	1	彼は私と同い年だ	□□□	He is as old as I (am).
	2	彼は私と同じだけの本を持っている	□□□	He has as many books as I (do/have).
	3	彼は私と同じだけのお金を持っている	□□□	He has as much money as I (do/have).
	4	彼は私ほど背が高くない	□□□	He is not as tall as I (am).
	5	彼は私ほど野球がうまくない	□□□	He doesn't play baseball as[so] well as I (do).
	6	彼は私ほどお金を持っていない	□□□	He doesn't have as[so] much money as I (do/have).
	7	イチローは(石川)遼の2倍の年だ	□□□	Ichiro is twice as old as Ryo.
	8	彼の部屋は僕の部屋の半分の広さだ	□□□	His room is half as large as mine.
	9	彼は僕の3倍の数の CD を持っている	□□□	He has three times as many CDs as I (do/have).
	10	この地図はあの地図より役に立つ	□□□	This map is more useful than that one.
	11	彼は私より野球がうまい	□□□	He plays baseball better than I (do).
	12	彼は私よりたくさんお金を持っている	□□□	He has more money than I (do/have).
	13	彼は私よりずっと背が高い	□□□	He is much[far/a lot] taller than I (am).

参考資料(5) リーディング・マラソン

＜ルール＞

① プリントをノートに貼り持参。

② 読むときは同プリントをラミネート加工した物を使用。

③ (A)～(C)の各パートを、与えられた秒内に正しい発音イントネーションで読むとクリアできる。

④ その際、下線で引かれた音読筆写の文は、日本語を英文にして読むこと。

⑤ (A)～(C)の順に挑戦し、次のいずれかができれば、次のパートに挑戦できる。

◎クリアし、♡ Congratulations! ♡の欄にはんこをもらう

○クリアできなくても、よく練習して３回挑戦する

ただし、練習した痕跡のない読み方や間違った発音では、１回と数えない

(B) 26 seconds

中国の人々は大豆のさまざまな利用法を考え出しました。 They invented miso and soy sauce about 2,500 years ago, and later, tofu. Buddhist monks in China played an important part in the development of soyfoods. 彼らは大豆から作られた食品を食べる必要があった because they could not eat meat or fish.

(C) 20 seconds

中国で始まった「豆腐ロード」は日本やアジアで終わりません。 Tofu has

♡ Congratulations! ♡　　You've passed the following parts!

一　年　　組　　番　（　　）　(A)　(B)　(C)

をする　②文法・構文に関する解説　③同意語の記入　④段落ごとの大意　⑤リスニング練習である。

そうした、補助を元にした授業の進行の中で、今後の検討課題とされていることは、①要領を得た説明をし、文の流れを敏感に感じ取らせることが必要　②新出語・重要語から同意語・反意語・派生語にできるだけ多く触れさせ、語彙力を増やす　③他の担当者との進度調節のため取捨選択して進める　④予習の動機付けとして補助プリントを配付しているが、予習が全ての生徒に浸透していない、であった。

教師が願うことと生徒が思っていることは異なる。馬を水辺にやっても水を飲ませることはできない。教師は常に生徒の成長を願って、時間を惜しまず仕事をこなしていくが、そうした日々の努力の中で、どこまでの支援をすることが効果があるのか、同僚とどう協力していくことが大切なのか、教育現場にある課題の解決は、一つの見方からだけでは論じられない要素があることがわかった。

そのあと、中井が平成 21 年度 4 カ国の高校生の勉強に関する調査（日本青少年研究所）の調査報告をもとに、あるべき教員の資質能力について話題提供を行った。出席者の先生や参加していた学生からの新鮮な感覚の質問に、更に考えることが必要と思う勉強会となった。

第 2 回勉強会　　6月 12 日（土）

大阪府立天王寺高等学校　山崎　陽子　教諭

守口高校・阿武野高校・千里高校と勤務され、現在は天王寺高校で教えられている山崎先生に、これまで赴任された高校における授業設計（デザイン）の違いや授業を設計・実践する上で大切に考えてこられたことを、実践事例をもとにお話していただいた。

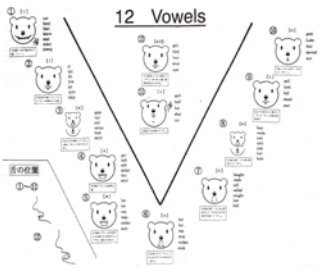
授業設計の理念は、高校卒業後も英語学習が続けられる基礎作り（興味･関心を引き出し､“英語好き”な生徒の育成）と語られた。そこで、

a）音声を重視する

・発音に自信を 12vowels の練習
　→ P-Bear 母音発音表の作成し繰り返し短時間でも練習する。

・スピーチを暗誦する ---- チャップリン「独裁者の演説」　など

・歌で学ぶ ----Honesty, Let It Be, You Are My Sunshine など多数、授業開始時に聞かせる。



最初の赴任校の生徒は卒業後何年も経った同窓会で、Honesty を諳んじて歌ってくれ、いい文章・内容は心に残ると再認識した。

・身につく音読として、5 回以上は読む練習をさせる。

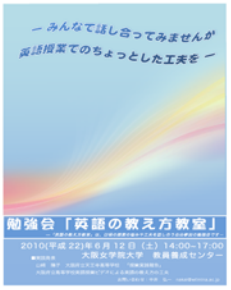
b）英語がコミュニケーションの手段であることを意識して All English in Class、リアルな例文提示＋自己表現練習、ミニ･トーク in English、Authentic Materials（新聞･雑誌、インターネットなどの記事）を扱うことを心がける。

c）予習の補助で、だれでも参加できる授業作り（英語Ⅰ・Ⅱ）

①本文プリント＋段落ごとに内容把握のための日本語の質問１つ＋記号付け活動（たとえば、動詞には◯印、連結詞に□印をつけさせる）などで歯ごたえのある文章をゲーム感覚で読むことなども考える。

②内容に関する意識付けQ＋First Reading（T or F）＋Second Reading（英問解答）＋ Intensive Reading（和訳）＋Extra Task（意見や感想を問う）

③本文プリント　文章番号つき＋パートごと内容把握問題＋和訳箇所指定など、対象生徒の学習目標に合わせた補助プリントを作成する。



d）英語力が定着するようにアウトプットの機会を多くする。

をモットーに授業に臨んでいるとのことであった。また、リスニングができればリーディングができると、その転移について話された。

今後の課題として、①自立した学習者育成のための指導法の引き出しをさらに増やし、実践すること②生徒のニーズを満たすこと（入試突破）ＶＳ英語が使える人材の育成の両立③何をどこまで求めるのかの見極め④自分自身の一層の英語運用能力の伸長をあげられた。日々研鑽に務められる先生の姿勢がうかがわれた。

次に、中井が教師と生徒との人間関係や勉強の約束事は授業設計（デザイン）の foundation となるのではないかと捉え、学び合う授業をつくり出す工夫として、相互支援・相互モニタリングを指導の理念とした授業のルール・環境づくりやペア活動などについて話題提供をした。北原延光 (2010)『英語授業の「幹」をつくる本』下巻の第一章 「授業におけるしつけと生徒指導、ペア学習」もとに北原メソッドを紹介した。

そのあと、学習意欲のある授業環境を創り出す基本的な教員の資質能力として、教員の授業コミュニケーション力・対話術が大切ではないかとし、上條晴夫 (2010)、山田洋一 (2010) の対話術項目を参考に、参加学生には先生に望む対話術トップ３を、参加教員には自分が効果的と思う対話術トップ３を選んでもらった。

結果、複数の学生が選んだ先生に望む対話術は、

わかりやすい話し方―端的に話す話術―

・自分のエピソードで話す　・黒板に図を描いて話す

集中させる話し方―心をつかむ話術

・まずは笑顔で話し出す　・黒板に話す内容を書いてから話す

あきさせない話し方―話に引き込む話術

・仕草・動作を入れて話す　・少しオーバーな表現をする

納得させる話し方―行動を促す話術

・最後のまとめを具体的にする

引き出し型対話術として「正答をゆさぶる」、**束ね型対話術**として「例示して、納得させる」、**寄り添い型対話術**として「共に悩んでみる、わからなさに共感する」であった。

一方、教員は、「短文主義で話をする」「まずは笑顔で話し出す」「複数の理由を順序よく話す」「最後のまとめを具体的にする」を複数回答した。

参加者が 20 名くらいの勉強会であったが、今回も発表をじっくりと聞いたり、とことん話し合ったりして、貴重な時間を持つことができた。

最後に、第１回・２回の発表者の先生には心より御礼申し上げたい。

参考：
上條晴夫 (2010)『教師の話し方スピード・上達法』たんぽぽ出版
山田洋一 (2010)『発問・説明・支持を越える対話術』さくら社

授業の玉手箱

英語の音声指導における一考察

夫　明美

今回は音声指導についていくつかの側面から考える機会を共有したいと思います。「使える英語」や「発信型英語」という指針のもと、「聞くこと」「話すこと」が重点化される昨今、音声指導は非常に重要ではないでしょうか。高等学校学習指導要領には、言語活動を効果的に行うため、次のような事項が指導の配慮として掲げられています。

1．リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら聞いたり話したりすること。（コミュニケーション英語Ⅰ、英語表現Ⅰ、英語会話）
2．英語の音声的な特徴や内容の展開などに注意しながら聞いたり話したりすること。（コミュニケーション英語Ⅱ、英語表現Ⅱ）
3．音声指導の補助として、発音記号を用いて指導することができること。（各教科にわたる指導計画の作成と内容の取り扱い）

１は音声学的には超分節音素に関するものです。その一つのリズムについては、日本語は全ての音節でリズムを作る音節拍リズムであるのに対して、英語は強い音節でリズムを作る強勢拍リズムとなります。強勢をもち，強く長めに発音される音節が一定のリズムに則って現れることを意味します。（以下の例文は『Sounds Make Perfect』英宝社より引用）●は強勢あり、　。は強勢なしを表します。

（日本語）すももをたべた　（７音節）
●●●●●●●
えみこはあかいすももをたべた
●●●●●●●●●●●●●●●　（14 音節）

（英語）
Tim eats plums.　（３音節）
●●　　●
Tim eats some plums.（４音節）
●●　　。　●
Tim is eating some plums.（６音節）
●　。●　。　　。　●
Tim will be eating some of his plums.（９音節）
●　。　。●。　。　。　。　●

中学生や高校生に対してこれらの現象の背後にある理論的なことを説明するのは、授業時間の制限などもあり，非現実的であるかも知れません。しかし，例文を設定して，授業のウオームアップ時間などを利用して、メトロノーム（手元にない場合は，先生による手拍子）を用いてリズム学習をすることも可能であり、有益です。強い音節があるところにメトロノームの音（もしくは手拍子）がくるようにして下さい。このためだけに文例を用意することは必須ではありません。リーディングや文法クラスの各単元におけるターゲットセンテンスをルールに当てはめてモデルを提示したあとに，復唱を繰り返すと、耳からも口からも学習することになるかと思います。

２にある「英語の音声的な特徴」は、1 にある内容を踏まえ、「リズム」「イントネーション」「話す速度」「声の大きさ」を指すと学習指導要領解説にあります。

３に関しては個々の音である分節音素の学習が欠かせません。日本語と英語では、母音においても子音においても異なる音韻体系を持ちます。英語には［ɑ］［ɔ:］［ə］［f］［v］［θ］［ð］など日本語には存在しない音素も多くあります。

また、英語では日本語の撥音「ん」と促音「っ」以外に見られない子音連続が頻繁に起こりますが、「撥音と促音以外、子音連続は起こらない」という日本語のルールの感覚から、英語の発音に不要な母音挿入が起こり、「カタカナ英語」のような発音で発声してしまいます。例えば desk［désk］という１音節の単語内の各子音の後に母音を挿入して、デスク」（[desuku]）という３拍の語を作ってしまうことです。また、個々の音や日本語には存在しない音に慣れるためには、その音素を取り出したミニマルペアなどの練習を地道に重ねていくことも有効ではないでしょうか。

そして、単語の発音練習は、日本語とは異なる綴りと音とを関連づけて学習することが、語彙の習得にもプラスに働くのではないかと思います。

今回ご紹介したことは断片的ではありますが、今後も本学主催の勉強会やニュースレターを通して，さまざまなアイデアをみなさまと共有する機会を持ちたいと思います。

参考資料
高等学校学習指導要領（外国語）平成 21 年度３月告示　文部科学省
今井由美子 他（2010）『Sounds Make Perfect』英宝社

書籍紹介

『［逐条解説］子どもの権利条約』

喜多明人・森田明美・広沢明・荒牧重人 著（2009）
日本評論社 2,400 円＋税

本書は、子どもの権利条約が国際連合で全会一致により採択されて 20 年目にあたる昨年のクリスマスに初版が刊行されました。各条についての解釈と資料の選択は丁寧になされています。また、本書の最初の部分には、条約が採択されて以降、そして現在のわが国の状況を、教育分野、福祉分野、少年司法分野、また子どもに関わる NPO や行政の取り組みについて、それぞれの分野に関わる筆者達により、分かりやすく記述されています。

本年の５月～６月にかけて、国連・子どもの権利委員会において第３回日本政府報告書の審査が行われました。1998 年、2004 年の前２回の審査では、日本の学校制度の、過度に競争的な性質といじめを含む学校での暴力に懸念が示されたところですが、子どもたちが自尊感情を抱き、自己を肯定的にとらえることへの支援が一層求められる今日、本書は子どもの権利条約を読み返す際の Handbook の一冊になると思われます。　（中垣芳隆）

編集後記　*Teaching is a Work of Heart.*

教員養成センター Newsletter 第２号が夢叶う七夕の日の発行となった。Newsletter の発行に留まらず、ＨＰの充実、学生には教職サークルというゼミ活動の一年生次からの実施、８月には教員免許状更新講習の実施と、小規模大学の教職課程ではあるが、誠心誠意、全力で様々な活動に取り組んでいる。不十分で行き届かないことも多々あるだろうが、学校現場に役立つことを少しでもできればと願っている。「教えるということは心が生み出すもの」を忘れず、本学生の spirit（熱情）、heart（こころ）、mind（思考力）を大切に、OJC オリジナルの創意工夫のある活動や確かな指導力に裏打ちされた教育を行っていきたい。（ひ）

大阪女学院大学・大阪女学院短期大学
教員養成センター Teacher-training Center
540-0004　大阪市中央区玉造２丁目 26 番 54 号
Tel: 06-6761-9371　Fax: 06-6761-9373
Homepage: http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc
e-mail: ttc@wilmina.ac.jp